

宇治二子山古墳・山本古墳発掘調査報告書

2019

宇治市教育委員会



口絵 宇治公民館からの遠景

序

宇治市では、現在、「歴史香るみどりゆたかで快適なまち」をテーマに総合的な街づくり事業に取り組み、中でも「歴史と景観が調和したまちづくり」として、宇治橋より上流域の景観の保全に努めているところです。

このような流れの中で、二子山古墳がある丘陵で開発計画があり、遺跡と景観を守るため二子山古墳の史跡・名勝指定を目指すことになり、発掘調査や名勝調査に取り組んできたところです。

二子山古墳は昭和 43 年に発掘調査が行われ、甲冑や鏡などの豊富な副葬品が出土しました。これらの出土遺物は京都府指定文化財となっています。この際の発掘調査も、丘陵の土砂採取工事に伴ったもので、南墳の墳形が確定できていない等の課題が残っていました。

今回の発掘調査は、これらの課題を解明するため行ったものです。また、併せてこれまで調査されてきた二子塚古墳や瓦塚古墳などの成果も再録し、宇治川右岸域の首長墓の変遷などについても一定の取りまとめを行いました。

幸い二子山古墳を含む宇治橋上流右岸域の丘陵は名勝宇治山として、二子山古墳や二子塚古墳は宇治古墳群として史跡指定を平成 30 年 10 月 15 日付けで受けることができました。これも偏に関係者の皆さまのご尽力の賜ものと感謝しております。

末筆になりましたが、ご理解とご協力をいただいた関係各位に厚く御礼を申し上げます。

平成 31 年 3 月

宇治市教育委員会

教育長 岸本 文子

例 言

1. 本書は、宇治二子山古墳・山本古墳発掘調査報告書である。
2. 本書は宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書の第91集にあたる。
3. 本書で使用する座標は、日本測地系を用いた。
4. 本書の土層色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・日本色彩研究所色標監修）第24版（2002年度）に従った。
5. 本書収録遺物に関する作業は下記の者が行った。
陰地祐輝 大下あかり 大平理紗 岡田大雄 河野マミ 佐藤 優 谷敷朋奈 畝麻由美 中谷俊哉
6. 本書に収録する遺物・調査資料については宇治市歴史資料館が保管している。
7. 本書の執筆作業は、荒川 史・大野壽子・上阪 航が担当し、松村 真・陰地・大平・岡田・中谷が一部を担った。図表・写真に関する作業は久後千穂・松村が分担した。
8. 本書の編集は、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が担当した。実務は、荒川の指導の下、久後が行った。

本文目次

1 章	位置と環境	1
1 節	地理的環境	1
2 節	歴史的環境	2
2 章	調査に至る経緯と経過	6
1 節	調査に至る経緯	6
2 節	調査の体制・調査の経過	6
3 章	宇治の古墳の調査研究略史	9
1 節	宇治古墳群の評価	9
2 節	観音山古墳	12
3 節	宇治二子山古墳	13
4 節	瓦塚古墳	17
5 章	二子塚古墳	20
4 章	二子山古墳・山本古墳の発掘調査	24
1 節	既往の調査	24
2 節	測量調査	28
3 節	二子山古墳南墳の発掘調査	31
4 節	二子山古墳北墳の発掘調査	59
5 節	山本古墳の発掘調査	65
6 節	発掘調査成果のまとめ	66
5 章	総括	67
付章	鉄製品の保存処理	69
付章	赤色立体地図から見る宇治古墳群と周辺地形	71

抄録

挿図目次

図 1	地質図（宇治市史 1 巻より改変）	1	図 23	第 3 調査区土層断面図	41
図 2	遺跡分布図（弥生から奈良時代）	3	図 24	第 4 調査区平面図及び土層断面図	43
図 3	作業風景（2～3 月）	8	図 25	第 4 調査区土層断面図	44
図 4	作業風景（7～10 月）	8	図 26	旧調査時出土盾形埴輪	47
図 5	観音山古墳墳丘測量図	12	図 27	旧調査時出土甲冑形埴輪	50
図 6	二子山古墳墳丘測量図（昭和 42 年）	14	図 28	出土遺物実測図（南墳出土埴輪）	53
図 7	二子山古墳出土遺物実測図	15	図 29	出土遺物実測図（南墳出土埴輪）	54
図 8	五瓦塚古墳墳丘測量図	18	図 30	出土遺物実測図（南墳出土須恵器）	57
図 9	瓦塚古墳出土遺物実測図	19	図 31	出土遺物実測図（南墳出土）	58
図 10	二子塚古墳墳丘測量図	20	図 32	第 1 調査区平面図	60
図 11	二子塚古墳出土遺物実測図	21	図 33	第 1 調査区南北方向断面図	61
図 12	二子山古墳・山本古墳の位置図	25	図 34	第 1 調査区東西方向断面図	62
図 13	採土前の地形図	26	図 35	出土遺物実測図（北墳出土）	64
図 14	遺構配置図	27	図 36	山本古墳土層断面図	65
図 15	測量図	30	図 37	保存処理（頸甲 短甲 胡籙金具）	72
図 16	調査区配置図	32	図 38	保存処理（肩甲）	73
図 17	第 1 調査区平面図	33	図 39	保存処理（小札）	74
図 18	第 1 調査区土層断面図	34	図 40	観音山古墳	75
図 19	第 2 調査区平面図及び東壁土層断面図	36	図 41	二子山古墳	76
図 20	第 2 調査区南断割土層断面図	37	図 42	瓦塚古墳	77
図 21	第 2・3 調査区検出遺構平面図及び立面図	38	図 43	二子塚古墳	78
図 22	第 3 調査区平面図及び東壁土層断面図	40			

挿表目次

表 1	出土遺物観察表（埴輪）	52
表 2	出土遺物観察表（その他）	56

1 章 位置と環境

1 節 地理的環境

宇治市は京都市の東南に位置する。現在、市域の東側には醍醐・笠取山地を中心に宇治丘陵が広がり、西側には宇治川などの沖積層で成る盆地が広がっている。

かつて、盆地部には巨椋池が存在していた。巨椋池は昭和 16 年の干拓により消失するが、遡れば伏見城築城に伴う治水事業が行われるまで、宇治川などから流水する大規模な貯水池であった。

この巨椋池と宇治川は、宇治市周辺の環境に大きく関与している。宇治川の源流は琵琶湖で、流れは醍醐・笠取山地の谷間を通り、盆地へ流れ出る。そのまま、盆地に流れた水は、盆地の低い部分で溜まり、巨椋池を形成した。巨椋池には、宇治川のほかに、京都南部を南下する桂川と南山城盆地を北上する木津川が流れ込み、やがて淀川として大阪湾に向けて流れ出ていた。



図 1 地質図（宇治市史 1 巻より改変）

『延喜式』などには、宇治川の谷口から巨椋池の東岸にかけて津があったことが記載されており、当時、すでに木津川を上って奈良方面への流通網が敷かれていたことが伺われる。古代においても、宇治川と巨椋池という大きな環境的要因がこの地域の生活に与していたことは想像に難くない。

宇治川が醍醐・笠取山地から低地部へ流れ出る谷口に近い低丘陵に二子山古墳は築かれた。この低丘陵は、南から朝日山、仏徳山と連なる丘陵の最北端にあり、独立丘陵をなす。丘陵斜面は比較的急で、頂部が狭い。

宇治二子山古墳は頂部に築かれた。2基が南北に連なっており、南に位置するものを南墳、北に位置するものを北墳と呼称している。標高は約70mと低いが、盆地に向かって飛び出すような形の丘陵の頂部に築かれているため、西から北へかけての眺めは非常に良い。

墳丘からは、南東にそびえる仏徳山や朝日山、喜撰山を背に、西に宇治川の谷口と巨椋池の広がりを見え、さらに北方の桃山丘陵や乙訓地方を一望できただろう。

2節 歴史的環境

生活の痕跡は、旧石器時代まで遡れる。弥生時代にはムラが成立し、やがて、国家の成立と成熟に伴い、要衝の地として重視されるようになる。その後、窯業が確立すると、ますますその意味合いが強調されることとなった。平安時代には、貴族が別業地を求め、特に藤原氏が別業を構えたことにより、保養地としての側面が表れるようになる。

弥生から平安時代の遺跡

宇治における旧石器から弥生時代の痕跡はかなり少ない。例えば、宇治川東岸の微高地に展開する寺界道遺跡では、縄文時代晩期の貯蔵穴から、深鉢形土器と浅鉢形土器が出土している。近接する五ヶ庄二子塚古墳では、旧石器時代のナイフ形石器と剥片が検出されており、両遺跡の近辺に集落が存在していたと推察される。

また、寺界道遺跡では、縄文時代晩期の貯蔵穴も確認されている。ほかに、古墳時代後期の竪穴住居や奈良時代の集落、特に後期を中心に古墳時代の遺物が多くみつかった。周辺域では、長期にわたり集落があったことを推察させる。

宇治川東岸の谷口に位置する乙方遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居や方形周溝墓などが確認されている。集落としての利用と墓地としての利用が想定でき、続く古墳時代にも、後期から末期にかけて同様に利用されていたとされる。宇治川西岸の谷口部にある塔の川遺跡も弥生遺跡のひとつである。

一方、宇治西岸にある若林遺跡でも、弥生時代の中期の集落跡や後期の方形周溝墓が確認されており、弥生時代には周辺域に集落があったと想定される。奈良時代の掘立柱建物も確認されており、続く古墳時代にも同様に集落があったと考えられる。宇治川西岸には、ほかに、神楽田遺跡や一里山遺跡などの弥生遺跡が存在する。

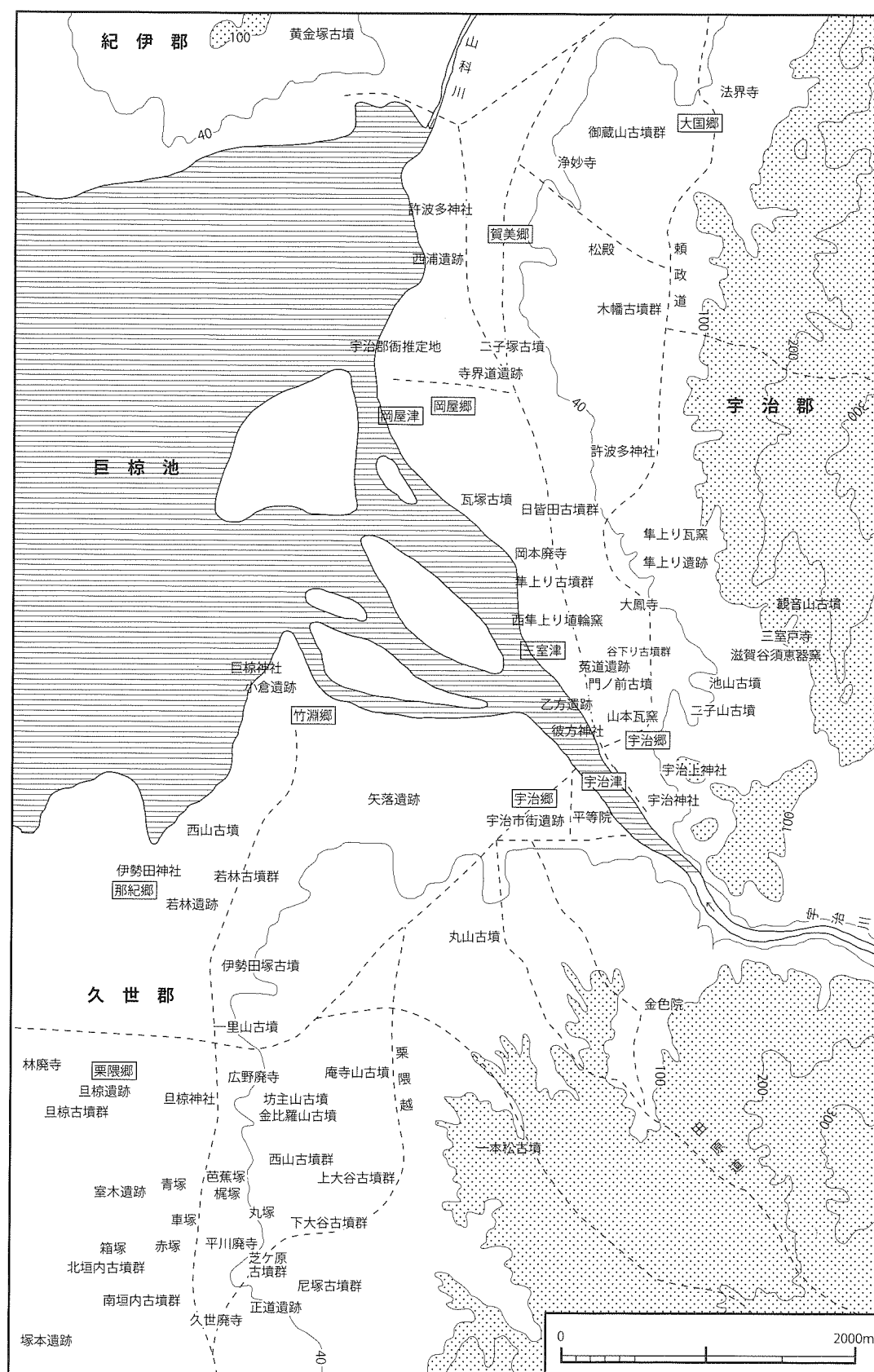


図2 遺跡分布図（弥生から奈良時代）

宇治における古墳の分布を大別すると二つの古墳群に分けられる。ひとつは宇治川沿いの宇治橋付近から六地蔵にかけて、笠取山地の急崖の裾に形成された洪積丘陵の端に点在する宇治川東部古墳群である。もうひとつの古墳群は宇治市南部の広野町から城陽市にかけて、宇治丘陵の末端部に立地し、研究史上、久津川古墳群の名で総称されるものである。

記紀にみる古代の宇治

ここでは宇治について『古事記』・『日本書紀』の記載を挙げてみる。宇治が記紀に登場するのは、ほぼ事実を反映したと思われる天武朝の記録を除けば、垂仁・仲哀・神功・仁徳・雄略などの各朝の部分にみられる。最初に宇治が目にとまるのは、『日本書紀』垂仁天皇三年の条に天日（あめのひ）櫛（ぼこ）が「菟道河（宇治川）」を通して北近江の「吾名邑（穴（あ）の）太（う）村（むら）」に至り、若狭を経て西へ向かい但馬へ行って居を構えた、というものである。宇治川の登場は古くから宇治が交通の要衝とされていたことを示している。また神功皇后摂政元年条にある忍熊王の反乱でも「菟道河」は重要な場所として登場する。

宇治が記録の中に登場するもっとも著名なものとしては応神紀から仁徳天皇即位前紀にかけて物語られる菟道稚郎子皇子の説話だといえる。菟道稚郎子は応神天皇と和珥氏の娘宮主宅媛（みやぬしやかひめ）の子である。非常に聡明であったため、応神天皇は菟道稚郎子を可愛がり、大山守（おおやまもり）皇子・大鰐鷯（おおささぎ）皇子（後の仁徳天皇）の二人の兄を差し置いて彼を皇太子とした。しかし、応神天皇の死後、菟道稚郎子は皇位を大鰐鷯皇子に譲り、また大鰐鷯皇子も皇位につかなかった。三年間の空位の後に、菟道稚郎子は自ら命を絶ち大鰐鷯皇子が皇位についたという。菟道稚郎子は生前宇治に住み、『播磨国風土記』には宇治天皇とも呼ばれ、死後は菟道の山上に葬られたという。

仲哀と神功との間に生まれた男子は即位して応神天皇となる。応神天皇の即位により歴史は新しい時代を迎えるが、宇治もたんに交通上の要衝というだけでなく政治的にも重要な地点となってくるのである。菟道稚郎子が皇太子として宇治にいたことなどをみても、政治的な発展をみせたことがうかがわれる。古墳の形成などとも対比しても同様なことがいえる。

宇治市教育委員会 1987『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』、第10集

宇治市 1988『宇治市史1 古代の歴史と景観』、第3版、1973年初版

宇治市教育委員会 1994『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』、第18集

宇治市教育委員会 1995『若林遺跡発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第31集）

宇治市歴史資料館 1996『宇治文庫7 発掘ものがたり宇治』

宇治市教育委員会 1997『乙方遺跡発掘調査概報—京阪宇治駅移転に伴う発掘調査—』（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第38集）

宇治市教育委員会 2001『宇治市街遺跡発掘調査概報』、第51集

宇治市歴史資料館監修 2002『宇治市遺跡地図』、2002年版、宇治市教育委員会

宇治市教育委員会 2002『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』、第52集

宇治市歴史資料館 2004 『宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書』、第 56 集

宇治市教育委員会 2012 『乙方遺跡発掘調査報告書』（宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 86 集）

2 章 調査にいたる経緯と経過

この発掘調査報告書では、宇治市宇治山本 35 ～ 37・40・42・48・62 番地で実施した、宇治二子山古墳・山本古墳の発掘調査成果について記録するものである。発掘調査調査は平成 28 年度から平成 29 年度の 2 か年度に渡った。

1 節 調査にいたる経緯

昭和 43 年の発掘調査の後、土砂採取工事は中断され、宇治二子山古墳は破壊されずに保全されてきた。しかし、平成 26 年 6 月 9 日、開発事業者より宇治山本地区において宅地開発の構想届出が出され、平成 27 年 3 月 9 日、開発に係る事前協議が行われた。提出された開発計画は、宇治二子山古墳から外れた位置ではあったが、宇治橋からの景観に重大な影響を及ぼすものと考えられた。さらに、事業者が宇治二子山古墳を含む丘陵全体の土地を取得していることから、今後、丘陵全体に開発が及ぶ可能性が予測された。

そこで宇治市としては、宇治二子山古墳を史跡指定して遺跡の保存を図るべく文化庁との協議を実施した。その協議の中で、宇治二子山古墳南墳の墳形が円墳か方墳か未確定なこと、北墳北西部の平坦面が造り出しである可能性が考えられることなどが問題となったため、発掘調査を実施して、南墳の墳形の確認、及び北墳の造り出しの有無の確認をすることとなった。

2 節 調査の体制・調査の経過

調査は、文化財保護法に基づいて宇治市教育委員会が発掘主体者となって実施したものであり、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が実務を担当した。

平成 28 年度の調査では、南墳の四隅に第 1 ～ 4 トレンチを設定した。調査面積は約 150 m²である。調査は、平成 29 年 2 月 7 日から平成 29 年 3 月 30 日まで実施した。

平成 29 年度の調査では、北墳の北方にのびる丘陵平坦面にトレンチを配した。調査面積は約 56.4 m²である。調査は、平成 29 年 7 月 10 日から平成 29 年 10 月 4 日まで実施した。

発掘調査組織は以下のとおりである。

発掘調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	石田 肇
発掘調査事務局	宇治市都市整備部	部 長	木下 健太郎
同	歴史まちづくり推進課	課 長	平野 正人
発掘調査担当	文化財保護係	係 長	杉本 宏（平成 28 年度まで）
		係 長	荒川 史（平成 29 年度から）
		主 任	大野 壽子

主 事 岡 紗佑里（平成 29 年度から）

調査員 嵯峨根絵美（平成 29 年度まで）

調査員 松宮 加奈（平成 28 年度まで）

調査員 松村 真（平成 29 年度から）

補助員 陰地祐輝 大平理紗 岡田大雄 谷敷朋奈 畝麻由美 中谷俊哉

発掘作業 やましろ文化財株式会社

指導機関 文化庁記念物課 京都府教育委員会文化財保護課 宇治二子山古墳保存整備検討
委員会

協力機関 株式会社ステージ 株式会社日照技術コンサルタント アジア航測株式会社 菟
道自治会 山本町内会 宇治教会附属愛児園

協力者 一瀬和夫 上原真人 杉原和雄 菱田哲郎 橘大学歴史遺産調査実習受講生（9
名）

（敬称略・五十音順）

調査期間中にご教授・ご協力いただいた方々には厚くお礼申し上げたい。



図3 作業風景（2～3月）



図4 作業風景（7～10月）

3章 宇治の古墳の調査研究略史

1節 宇治古墳群の評価

巨椋池と古墳群

山城地方中央部の、北を京都市伏見区、南を久御山町、西を八幡市、東を宇治市とする広大な平野部は豊かな水田地帯であり、北山城を流下する桂川、南から流れ至る木津川そして宇治川の山城三河川がここで合流し、淀川となって大阪平野へと流れ出ている。北山城地方と南山城地方との境界域でもある。

ここには昭和16年の干拓完了まで巨椋池と呼ばれた延長16kmに及ぶ湖水があった。先の山城三河川が形成した滞水域である。地形的に山城地方はこの巨椋池によって南北に分けられていた。ただし交通面から考えれば、琵琶湖から山科川を介した東国へのルート、桂川を介した北山城地方から丹波そして日本海側へのルート、木津川を介した大和盆地あるいは伊勢湾岸へのルート、そして淀川を介した大阪平野から瀬戸内へのルートの、まさに日本列島全域への交通結節点ともいえるような場所でもあった。

巨椋池が干拓前のような広い湖水面をもったのは、文禄3年(1594)の豊臣秀吉の伏見城築城に伴う太閤堤築堤によって、宇治川が巨椋池より切り離されたのに始まる池化である。それ以前は、諸河川の遊水池としての巨大な水溜りであり、水深は浅く、季節によってその形を変える洲や島があちこちに形成され、その中を網目状に水路が流れていた。かつて巨椋池は、山城国を南北に分断する自然障壁として把握されることが多かったが、近年の発掘調査によって、この岸边に弥生時代以降、豊かな農耕村落が形成されていることが明らかとなり、巨椋池を介して周辺地域が結びつく、いわゆる地域圏の存在も考えられるようになってきた。

この巨椋池の周囲には、全長100mを超える大型前方後円墳を持つ特色ある古墳群が取り巻いている。一つは巨椋池南岸部の城陽市にある全長180mの史跡久津川車塚古墳を盟主とする久津川古墳群。一つは西岸部の長岡京市にある全長120mの史跡恵解山古墳を盟主とする長岡古墳群。そしてもう一つが東岸部の宇治市にある全長112mの五ヶ庄二子塚古墳を盟主とする宇治古墳群である。

宇治古墳群の構成

宇治古墳群は、巨椋池東岸域の南北約3km東西約1kmの範囲の丘陵裾部に連続的に展開する前期から後期にいたる古墳群で、総数140基ほどが知られる。時期的なまとまりによって、前期から後期にいたる南半分の宇治枝群と後期に爆発的に発展する北半分の木幡枝群とに分けることも可能である。行政区としては宇治市宇治・菟道・五ヶ庄・木幡にあたり、旧宇治郡域となる。地域的には宇治枝群は『日本書紀』に登場する「菟道(ウジ)」域に、木幡枝群は「木幡(コハタ)」域に該当する。

(1) 宇治支群

宇治支群は、宇治川が巨椋池に流れ出す谷口部東岸に展開する古墳群で、前期から後期にいたる確認数 15 基の古墳で構成されている。現在、主要な首長墳 4 基が現存している。古墳群の形成を時間的に見ると、まず前期の古墳として、三室戸寺背後丘陵の標高 167m の頂部に立地する観音山古墳がある。宇治古墳群中、最高所に立地する古墳である。直径 47m の円墳で竪穴式石槨を内蔵していると想定されている。この古墳からの眺望は良く、旧巨椋池範囲から乙訓地域全部を見渡すことができる。

中期になると宇治橋東の丘陵上に円墳の二子山古墳北墳が中期前葉に、中期中葉に南墳が継起的に築造される。北墳は直径 42m を測り割竹形木棺を内蔵する 3 基の主体部が確認されており、完存の西槨からは仿製鏡・玉類はじめ短甲・衝角付冑や多くの鉄製武器・農工具類が出土している。南墳は直径 36m、箱式木棺を内蔵する主体部が確認されており、仿製鏡・玉類はじめ 2 領の短甲・衝角付冑、挂甲、馬具類や多くの鉄製武器・農工具類が出土している。この両墳とも、中規模円墳のわりには古墳時代中期を代表する鉄製武器・武具・農工具を多量副葬する特色があり、また北墳では鉄柄付手斧、南墳では三環鈴などの全国的に出土例が少ないものが出土している特徴がある。

二子山南墳にすこし遅れて中期後葉に、北約 2 km の巨椋池岸部の台地上に瓦塚古墳が築造される。直径 30m ほどの円墳で、2 基の主体部が重複して検出されている。第 1 主体は河原石で棺を覆った礫槨、第 2 主体は組合せ式木棺である。この礫槨は近畿地方では他に例を見ない珍しいものである。出土品には多数のガラス製玉類のほか、金製と銀製の頭金具を付けた金銅製軸の杖状ミニチュアが出土している。金製のものは姫路市宮山古墳に類例があり、銀製のものは東京国立博物館所蔵の朝鮮半島出土品に類例がある。共に朝鮮半島製の金具としてよく、かなり珍しいものである。

後期前半になると、二子山古墳のすぐ北側の平野部に門ノ前古墳が造られる。全長 35m の前方後円墳で、古くに墳丘は完全に削平され周濠のみが検出されている。宇治支群唯一の前方後円墳である。周濠内からは多数の器財埴輪・動物埴輪・人物埴輪等の破片と伴に陶棺片も出土しており、埋葬施設の形式は不明だが陶棺を内蔵していたことが分かっている。

後期後半になると、そのすぐ北隣りに谷下がり古墳群が形成される。直径 10m ほどの横穴式石室を内蔵する円墳 3 基で構成される小規模な後期群集墳で、古くに墳丘は完全に削平され周濠と石室最下段のみが検出されている。また、この北側にも同様な横穴式石室を内蔵する円墳 3 基で構成される隼上り古墳群があったが、高速道路建設で消滅した。

(2) 木幡支群

木幡支群は、巨椋池東岸部北側の山科盆地との接合部辺りまでに展開する。総数は 130 基ほどが確認できる。すべて後期の古墳であり、首長墳は前方後円墳の五ヶ庄二子塚古墳の 1 基であり、他はすべて後期群集墳である木幡古墳群に含まれる。

二子塚古墳は、巨椋池岸部の台地上に立地する前方後円墳で墳丘全長 112m を測り、二重周濠を備える。築造時期は後期初頭と考えられる。かつて鉄道施設時の土取りで後円部が壊された時に大型の石組が確認されており、その後の発掘調査でも石室構築の基礎礫が検出されているため、初期型の横穴式石室を内蔵していたものと考えられる。墳丘の規格は高槻市の今城塚古墳ときわめて類似し、その 3 分の 2 の規模となる。また、出土埴輪の胎土分析からは、今城塚古墳に埴輪を供給した新池埴輪窯産のものが含まれていることが指摘されている。二子塚古墳は後期初頭の中では、旧山城国で最大規模の古墳であり、近畿圏内でも有数の規模を誇る。

この二子塚古墳の築造を契機に東側丘陵上の尾根筋を中心に木幡古墳群が形成され始める。現状で 125 基ほどの直径 10 ～ 20m の円墳が確認されており、そのうち約 120 基が宮内庁の管理する宇治陵墓群敷地に含まれる。宇治陵墓群敷地外では墳丘を残す古墳はないが、隣接する場所で古くに耕作に伴って墳丘が削平され周濠のみ残す古墳の痕跡がしばしば検出されており、これら失われた古墳の状況から類推すると 150 基近い大規模群集墳であった可能性は高い。山城地方最大級の後期群集墳である。造墓開始時期は、削平された古墳から出土する埴輪や須恵器類から後期中葉には始まっていることが理解され、宇治陵墓群内の古墳には多数の石材抜き取り痕跡を持つものが含まれるため、後葉には横穴式石室を内蔵する後期群集墳へと発達を遂げているものと推測できる。

宇治古墳群の評価

巨椋池東岸にそって展開する宇治古墳群の特徴は、次のいくつかの点が指摘できる。

第一に、宇治古墳群における主要首長墳は、いずれも巨椋池を望む台地縁辺部ないしは丘陵上に築造されており、巨椋池を一貫して強く意識していることがあげられる。特に宇治二子山古墳においては、巨椋池のみならず宇治川の渡しを眼下に望む丘陵上に立地し、水陸交通の要衝部の掌握が意図されていることを十分に理解できるものとなっている。古墳群と当時の交通路との関係が明瞭に把握可能であり、古墳時代社会を理解するうえできわめて重要である。

第二に、宇治・木幡古墳群は、古墳時代前期から後期に至るまで連綿と首長墳が築造され続けた、長期にわたる古墳群である点に特徴がある。かつ前期から中期にかけては宇治支群を中心に中型円墳の首長墳が継起的に築造され、後期に至り木幡支群に中心を移動し同時期で山城最大級の二子塚古墳を生み出し、それを契機に背後丘陵に大型の後期群集墳が成立するという、時期ごとの変化を明確に読み取ることができる。このような古墳群の動きは、当時の大王権と地域首長権との関係を背景とするもので、前・中期における墳丘規制の実態と、後期における地域首長権の急速な勃興は、古墳時代における政治的変遷を明確に反映する点においてきわめて重要である。

第三に、宇治古墳群の各首長墳はきわめて個性的な点である。前期の観音山古墳は未調査に近いため不明な点が多いが、中期の中規模円墳二子山古墳にみる多量の鉄製武器・武具や全国

的に出土例が稀な三環鈴や鉄柄付手斧などの副葬、同じく瓦塚古墳にみる近畿圏では例のない礫槨や朝鮮半島製金具の副葬、二子塚古墳にみる同時期山城最大級規模と継体天皇真陵とされる今城塚古墳との墳丘同規格など、いずれも被葬者の性格を明確に反映しているものであり、その具体像を知る上できわめて重要である。

第四に、『日本書紀』などに記載される当時の歴史的イベント等と宇治古墳群との関連性が指摘できる点である。『日本書紀』の応神紀と仁徳即位前紀には、応神天皇皇子である菟道稚郎子の存在と拠点である宇治宮の存在、彼の埋葬所としての宇治の山上を記す。前期から中期にかけて宇治の丘陵上に築造された中規模円墳とこの記録との関係性は注意が必要である。また、継体紀には彼が大和に入るまでに山城地方の筒城宮と弟国宮に居住したことが記される。この記録と同時期の二子塚古墳は継体天皇真陵とされる今城塚古墳と同規格であり、両者の関係性が強く想起されるなど、歴史的な文献記録と考古学的事象との関係を考えるうえできわめて重要である。

以上のように、宇治古墳群は古墳時代における地域史の復元のみにとどまらず、古墳時代の政治や社会の実態を解明するうえで欠くことのできないものであり、この古墳群を構成する前期から後期にいたる主要な首長墳である観音山古墳、二子山北墳・南墳、瓦塚古墳、二子塚古墳の5基は現存している。これら古墳を全体として保全し未来へ継承することは、日本の歴史研究と文化財保護の上できわめて重要である。

2 節 観音山古墳

立地と調査歴

観音山古墳は、宇治市菟道滋賀谷の三室戸寺本堂背後の通称観音山の頂部に所在する大型の円墳である。古墳の標高は167mを測り、当該地域では最も高所に築造された。古墳からの眺望はすこぶる良く、西へは眼下に菟道の平野部を通して宇治川の流れ、そして巨椋

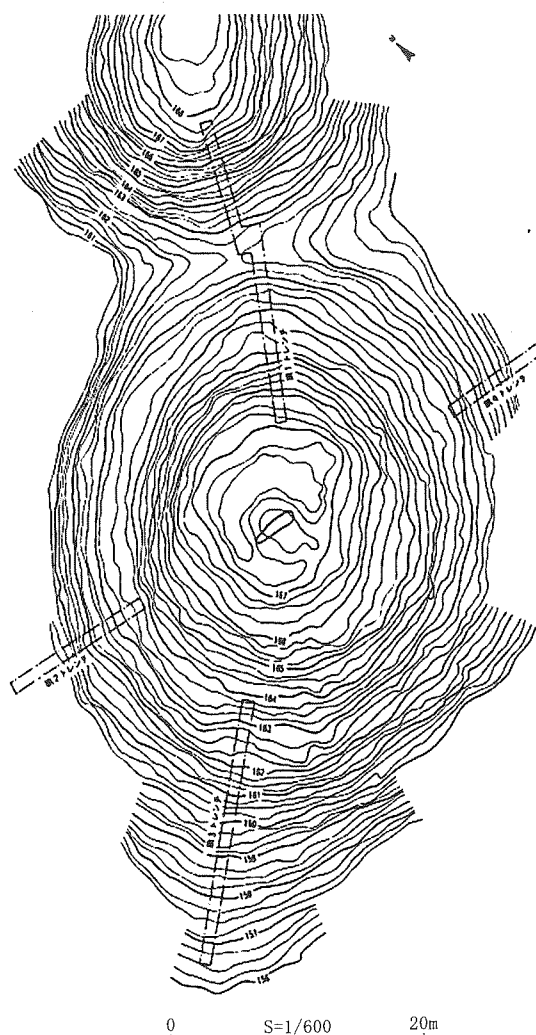


図5 観音山古墳墳丘測量図

池の干拓地、さらに乙訓地方の山々を遠望できる。宇治川右岸の菟道の平野部は、平安期に宇治川左岸が栄え現在の宇治市街につながる前の、古い時代の宇治の中心域で、宇治二子山古墳・門ノ前古墳などの首長墳、白鳳期の大鳳寺跡、古墳時代前期から平安時代にいたる集落跡の菟道遺跡が展開している。平成13年に龍谷大学考古学資料室により墳丘の測量と部分的な試掘が実施されている。

墳丘と出土品

古墳は、宇治東部を南北に延びる醍醐山地から西に派生する尾根の頂部の丘尾を切断するように、丘陵頂部幅いっぱいに築造されている。直径47m、高さ5.5mを測る円墳で2段築成となっており、けっこう背高の印象を受ける。外表面に山石を利用した葺石が確認できるが、埴輪は見つかっていない。墳頂部に既掘壙があり、周辺に結晶片岩の板石が散乱しているため、堅穴式石槨を内蔵しているものと考えられる。採集品として鉄剣・直刀の破片がある。

評価

観音山古墳の特徴は以下の点が指摘できる。

第一に、観音山古墳の立地から、この古墳被葬者が意識した範囲は、眼下の菟道平野部と巨椋池であることが明瞭に読み取れる点は、この古墳の被葬者像を理解するうえで重要である。

第二に、前期に遡る古墳は、宇治古墳群には本墳しか現在確認されておらず、古墳群形成期の状況をうかがう唯一のものとなっている。

観音山古墳は一部に既掘壙がみられるが、全体として良好な保存状態にあり、宇治古墳群の形成過程を知るうえで貴重な文化財といえる。

3節 二子山古墳

立地と調査歴

二子山古墳は、宇治市宇治山本32番地他に所在する2基の中型円墳である。古墳は、南北に延びる丘陵の頂部に南北に連なって築造されている。北側の古墳を北墳、南側を南墳と呼ぶ。

ちょうどこの辺りは、宇治川が平野部に流れ出す谷口部にあたり、古くから宇治の町場が栄えたところである。現在の観光宇治の中心域でもある。宇治川右岸は低丘陵と扇状地形の発達した左岸と違い、醍醐山系を構成する山丘が連なっており、特に谷口部は宇治川に接して標高131mの主峰仏徳山を核に、北に向かって順次ピークを造りながら下る山丘が続いている。この最終頂部である通称二子山の頂に古墳は築造されている。標高71.5mを測り、北麓平野部との比高は40mほどである。古墳の現況は丘陵裾部に竹林、古墳部分は松及びブナなどの若い樹木が繁茂しており、宇治川右岸山丘の緑地の一角を構成している。

古墳に登ると、西ないし北への眺望はすこぶる良く、西へは眼下にかつての宇治の渡しを通

して巨椋池干拓地、そして遠く乙訓地方の山々を遠望できる。北へは、宇治川の流れが全望でき、その向こうに桃山丘陵さらに洛北の愛宕山まで眺望できる。

この古墳の発掘調査は、山麓の土取り工事に伴って昭和43年に実施されており、多量の副葬

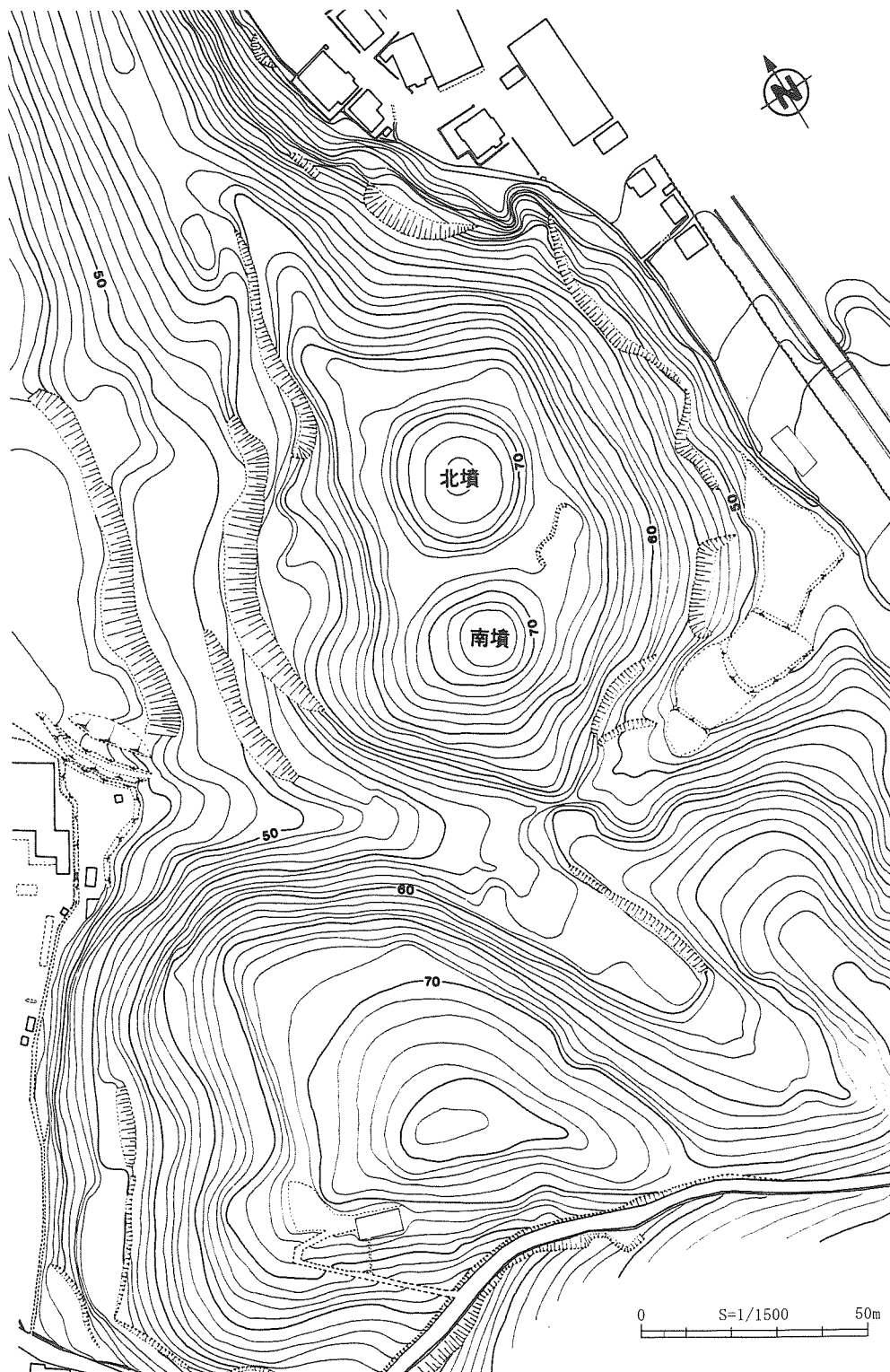


図6 二子山古墳墳丘測量図

品が発掘されている。古墳は発掘調査後保全され現在に至っており、現植生はこの経過の中で自然復元したものである。なお、出土品に関しては昭和 63 年に宇治市指定文化財に指定され、平成 6 年に京都府指定文化財に指定されている。平成 28 年からは宇治市によって試掘調査が継続されている。

北墳

北墳は直径 40m、高さ 4.3m を測る円墳で、段築は確認されていない。築造方法は丘陵頂部北側を円墳形に削り出した後、上部に盛り土を行い成形している。外表施設として墳丘裾と墳頂部外周に埴輪列が圍繞する。円筒埴輪には黒斑が認められる。家形や盾形・甲冑形などの形象埴輪片が確認できるため、墳頂にこれらが樹立されていたとみてよい。墳丘裾部で葺石が確認されている。

北墳の埋葬施設は、墳頂中心部で南北軸の 3 基の埋葬施設が並列配置された状況で確認されている。このうち、中央槨と東槨は大型同一墓壙に埋葬され、西槨は追葬されている。埋葬順は東槨が最初で、次いで中央槨、最後に西槨となっている。

東槨は墳丘中心に位置するもので、墳頂下 1.3m 地点で検出された。中央部を大きく攪乱されているが両端木口が遺存しており、形状から長さ 557 cm、南木口幅 62 cm の割竹形木棺を粘土で被覆した粘土槨であることが分かっている。副葬品は南木口棺外に約 90 点の鉄製農工具類が

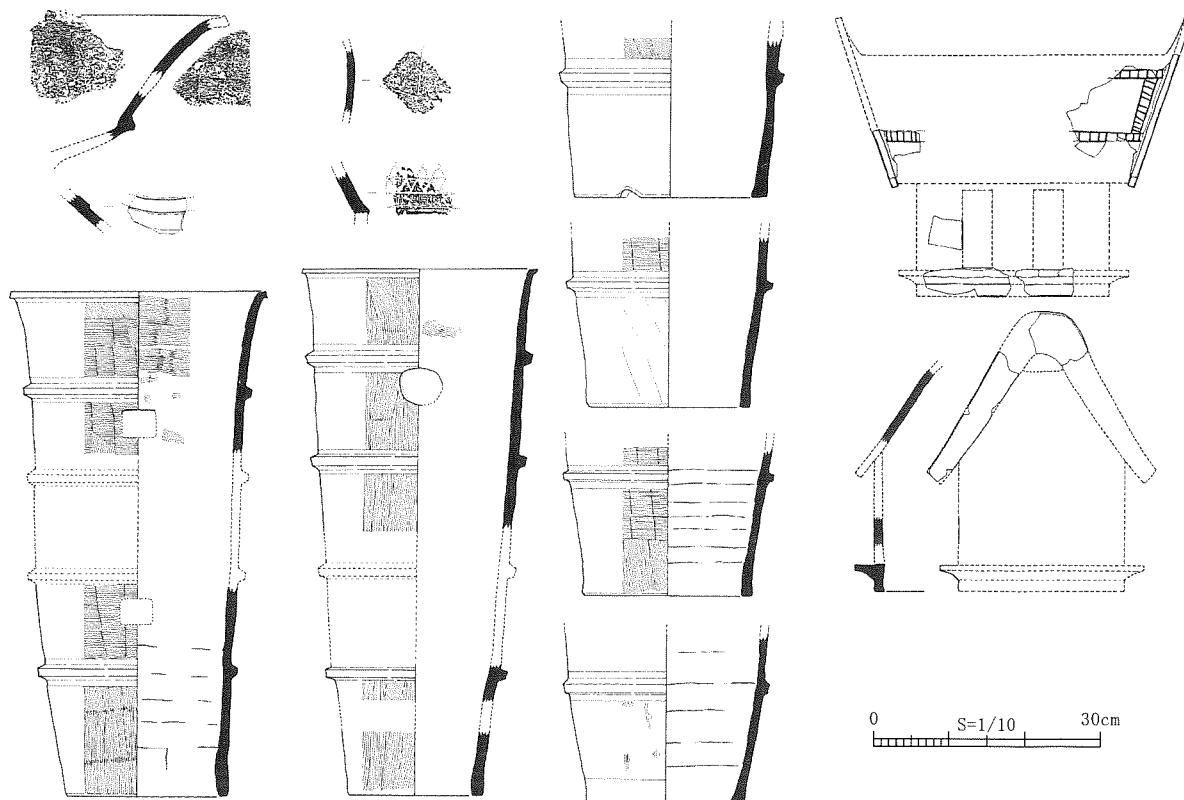


図 7 二子山古墳出土遺物実測図

まとめておかれていた。

中央槨は墳丘中心にやや西に位置するもので、墳頂下 0.7m 地点で検出された。中央部から北を大きく攪乱されており規模確定ができない。木棺は南木口幅 60cm の割竹形木棺の直葬である。木棺全長は 5.5m ほどに推定できる。副葬品は棺内南木口寄りに 110 点ほどの鉄製農工具・鉄鏃が置かれていた。

西槨は墳丘中心西寄りに位置するもので、墳頂下 1.7m 地点で検出された。攪乱はされていない。棺は北端木口幅 73cm、南端木口幅 66 cm、長さ 383 cm の割竹形木棺であり、これを粘土で被覆した粘土槨である。副葬品は棺上に漆楯、棺内南側に長方板革綴短甲と頸甲・肩甲が組み合わされ中に三角板甲革綴衝角付冑が入れられ、その南に鉄柄付手斧を含む鉄製農工具・刀剣・鉄鏃等が 40 点ほどまとめておかれていた。棺中央部両側に刀剣、頭部側の北木口に仿製半円方形帯神獸鏡 1 面・玉類・漆塗堅櫛が置かれていた。棺外にも刀剣・矛がおかれていた。

北墳の築造年代は、副葬品と埴輪の形式から考えて、古墳時代中期初頭から前葉に比定できる。

南墳

南墳は直径 34m、高さ 4.3m を測る円墳で、段築は確認されていない。平成 28 年度の宇治市の試掘により墳形と規模が確定した。築造方法は北墳と同じく丘陵頂部南半を円墳形に削り出した後、上部から裾部にかけて広範に盛り土を行い成形している。外表施設としては埴輪列を確認していないが、墳丘斜面から家形・甲冑形等の形象埴輪片が出土するため、頂部にこれらが樹立されていたことが理解できる。黒班が認められる。葺石は確認できていない。

埋葬施設は墳丘中心直下で東西軸の主体部が 1 基検出されている。棺は箱形木棺で、全長 418cm、東端幅 80 cm を測る。西端は部分的に攪乱されており不明。

副葬品は、棺上に漆楯、棺内は足元となる西側に横矧板鉾留短甲と頸甲・肩甲が組み合わされ中に横矧板鉾留綴衝角付冑と挂甲が入れられていた。その横に籠手、さらに西側に胡籙に入れられた鉄鏃の束が 3 組 120 本置かれていた。棺内中央は両側に直刀と剣が置かれ、西側寄りに有機質小箱に入った仿製四葉文鏡と多数の白玉及び刀子、東側の頭部付近に玉類、東端に横矧板三角板併用鉾留短甲と頸甲・小札肩甲が組み合わされ中に三環鈴が入れられていた。その周囲には革草摺と馬具が置かれ、棺外の東端には馬具類、両側に矛が置かれていた。

南墳の築造年代は、副葬品の形式から考えて、古墳時代中期中葉から後葉に比定できるが、埴輪の型式は一時期古く、ほぼ北墳と同時期となる。この年代的矛盾に関しては、現在確認されている主体部に先行する当初の埋葬を想定する必要がある、今後の調査に期するところが大い。

評価

二子山古墳の特徴は以下の点が指摘できる。

第一に、二子山古墳の立地は、古くは天日矛伝説に登場する宇治川の渡しを眼下に置き、広くかつての巨椋池全体から乙訓地方までを眺望できる絶好の地である点は重要である。宇治古墳群の首長墳は、いずれも巨椋池を強く意識して占地しているが、二子山古墳に関しては、水陸交通の要衝となる宇治川の渡しとの関係がより強く意識されており、この古墳の被葬者像を理解するうえで重要である。

第二に、中型円墳が2基、埋葬施設としては4基以上が、古墳時代中期初頭から後葉にかけて長期的に継続的に築造されている点があげられる。このような、長期にわたる地域首長権の安定した移行を古墳から確認できる事例は必ずしも多くなく、地域首長権の実態を考えるうえで重要である。

第三に、南北両墳とも中規模円墳であるにも関わらず、副葬品の質が高くかつ多量である点があげられる。特に古墳時代中期を特徴づける鉄製武器・武具に関して顕著である。甲冑に関しては4領が出土している。また、これらの型式についても、北墳では甲冑は革綴式であるのに対し南墳では鈿留式に変化しているとともに、新式の挂甲やまだ珍しい馬具が副葬されている。朝鮮半島の馬具から進化した三環鈴が甲冑内に置かれていたことも珍しい事例である。このような、副葬品のあり方とその変化は、古墳時代中期の鉄製武器・武具の変遷を明確に反映するとともに、先にあげた諸点と関連しあいながら、地域首長の実像を示す典型的な事例として重要である。

4節 瓦塚古墳

立地と調査歴

瓦塚古墳は、宇治市五ヶ庄瓦塚32番地の水田中に所在する中型の円墳である。古墳の標高は21mほどを測る。地元の通称は「まるやま」であり、墳丘上は畑として耕作されている。この付近で唯一平野に遺存する古墳である。瓦塚の小字は、付近から古瓦が多く見つかったことによるという。

宇治川東部域は、ちょうど中程に現在、陸上自衛隊の補給処と京都大学宇治キャンパスとして利用されている広い台地形がある。これは東の醍醐山系から巨椋池に向かって張り出す低平な丘陵の末端にあたり、小河川がないため中世から近世にかけて開拓されるまで耕作に向かない土地柄であった。この台地形の南側が『日本書紀』に記載される地域古称「菟道（ウジ）」にあたり、北側が「木幡（コハタ）」にあたると想定できる。

本墳は、この台地形の南西端部の巨椋池へと至る岸部に築造されている。地域古称ウジの最北端部にあたる。この辺りは遺跡がまとまっており、古墳のすぐ南には白鳳期寺院の岡本廃寺があり、その横にいずれも削平されているが、小型の低平な2基の方墳からなる日皆田古墳群、

横穴式石室であったと思われる一里塚古墳が存在した。

本墳の発掘調査は、耕作で主体部が露出したことにより昭和 62 年度に実施されている。

墳丘と出土品

古墳は、直径 30m、高さ 2.5m を測る円墳で 2 段築成である。周囲の水田の畦畔形状から周濠が推測されるが確認されていない。外表施設は、段築テラスに埴輪列の圍繞が確認され、葺石が検出されている。埴輪は無黒班である。

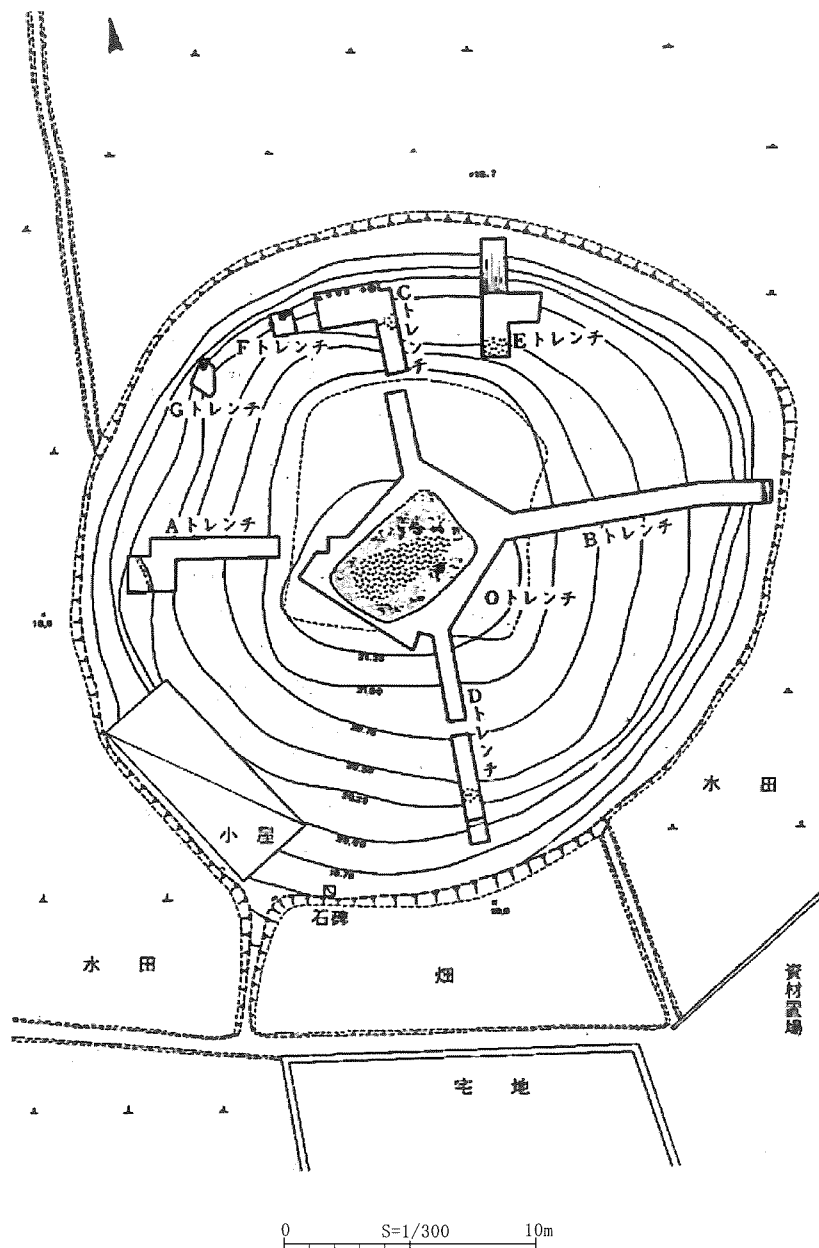


図 8 瓦塚古墳墳丘測量図

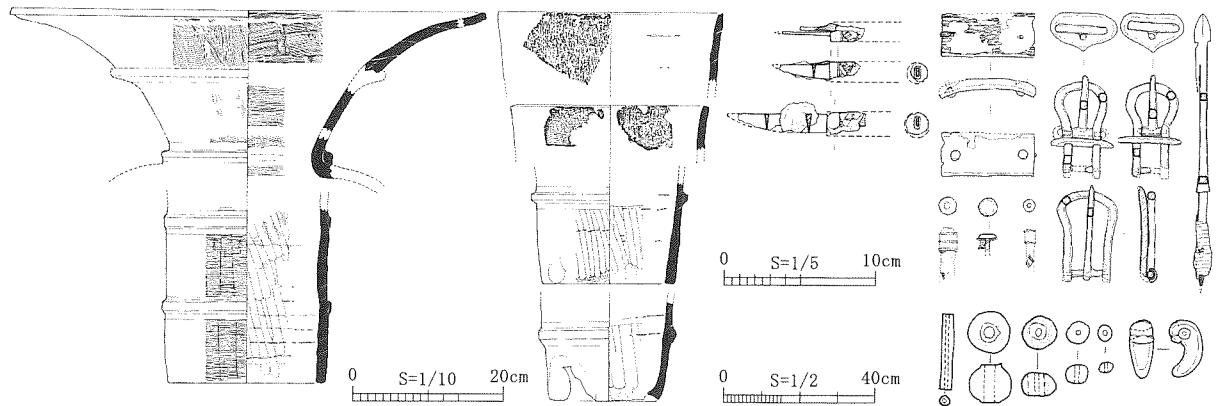


図9 瓦塚古墳出土遺物実測図

埋葬施設は墳頂中心部で上下に重なって2基が検出されている。第1主体は、棺を多量の河原石で被覆する礫槨である。礫槨の全長は4.4m、幅は1.4mを測る。木棺の型式は不明。軸は北東から南西である。全体の3分の2に既掘墳の痕跡が認められた。棺内及び礫槨内から鏡や鞍金具などの馬具が出土している。第2主体は、その直上で検出された箱形木棺の直葬であり、木口部が遺存していた。木棺の幅は60cm、棺内から鉄鏃40本と鹿角装刀子8本が検出された。既掘墳内からは、硬玉製勾玉・小玉各1個、碧玉製管玉7個、ガラス製小玉674個、小型の金製と銀製の頭金具を持つ玉杖形金銅製品が見つかった。この金銅製品は、金製頭金具のものは姫路市宮山古墳に国内唯一の類例があり、銀製頭金具のものは東京国立博物館が収蔵する朝鮮半島出土品に類例がある。いずれも朝鮮半島製のものとしてよい。この金具については、本来、ベルトに多数吊り下げられた飾金具の一つであると思われるが、本出土例の使用に関しては不明である。

瓦塚古墳の年代については、埴輪と鉄鏃の型式から、古墳時代中期後葉に比定できる。

評価

瓦塚古墳の特徴は以下の点が指摘できる。

第一に、瓦塚古墳の立地から、この古墳被葬者が強く巨椋池を意識していることが明瞭に読み取れる点は、この古墳の被葬者像を踏まえ、古墳時代における交通網と古墳築造との関係を理解するうえで重要である。

第二に、第1主体の礫槨は、近畿地方では他に例のないものであり、この古墳を特徴づけている。礫槨は国内では、関東から東北にかけて10例程度が知られ、また朝鮮半島においても事例が知られるものであり、これら地域との関係が想起できる点は重要である。

第三に、既掘墳内からではあるが、多量の玉類が出土し、小型の金製と銀製の頭金具を持つ玉杖形金銅製品も出土している点は、重要である。既掘墳内からはこの他、馬具の一部と思われる金銅製品断片と鉄製工具の破片と思われるものがあるのみで、鉄製武器武具類の破片は皆無である。すなわち、この古墳の副葬品は、多量の玉類と朝鮮半島製の杖型金銅製品そして馬

具が主体であると想定でき、鉄製武器としては第2主体部の鉄鏃のみとなっている。武器・武具の副葬が一般的な同時期にあっては珍しい状況であり、被葬者の性格を考えるうえで重要である。

以上のように瓦塚古墳については、巨椋池内水交通を意識し、墳丘自体は中型の通有の円墳であるものの、主体部や副葬品に朝鮮半島との関係をうかがわせる内容を持つ点で重要である。また、同時期の二子山古墳南墳と比較すると武器・武具副葬において大きな差異がある点をあわせ、宇治・木幡古墳群内における首長層の多様性をうかがう古墳としてきわめて重要である。

5節 二子塚古墳

立地と調査歴

二子塚古墳は、宇治市五ヶ庄大林46番地他に所在する後期の大型前方後円墳であり、二重周濠をもつ。この辺りは東側に連なる醍醐山系と西の旧巨椋池との間に形成された沖積台地が展開しており、西に向かって緩やかに傾斜している。古墳はこの台地の西端、旧巨椋池の岸にほど近い場所に築造されており、古墳の西側で標高は21mほど、東側で28mほどを測る。古墳は現在、西方寺の境内となっており墳丘は竹藪で覆われている。西側には周濠の一部が農業用ため池として残り、この周濠とそれを取り巻く外堤が宇治市の二子塚公園として整備されている。古墳の東には京阪電鉄宇治線の軌道敷きが通り、土地の改変が進んでいる。

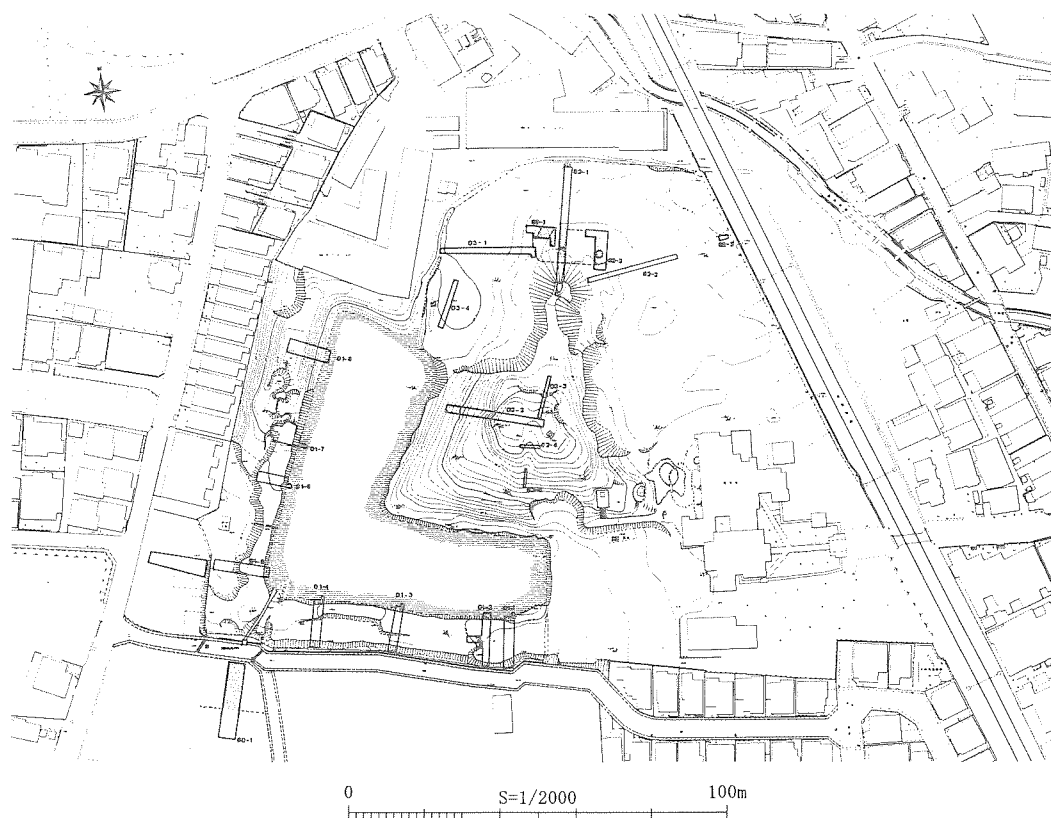


図10 二子塚古墳墳丘測量図

古墳の周辺には、多くの遺跡が分布している。古墳の西側の旧巨椋池岸部に古代の津跡である岡屋津が想定され、古墳と岡屋津想定地の間に宇治郡衙跡が想定されている。岡屋津は郡大津であり、古代の巨椋池水上交通の拠点の一つでもあった。古墳の南に広がる縄文終末期から奈良時代にかけての集落跡である寺界道遺跡では、古墳時代後期の竪穴住居跡はじめ奈良時代の建物跡や陶硯が検出されており、当該地区が宇治川東部域での一つの核であったことが理解できる。

本墳の発掘調査は、昭和60年に外濠の発掘、昭和62年から平成元年度までの3年と平成3年度の計4年間にわたって墳丘と外堤部の発掘調査を行っている。

墳丘と出土品

五ヶ庄二子塚古墳は主軸を南北に置く前方後円墳である。現状としては後円部が削平され周濠も西側以外は埋められていたが、発掘調査により基礎的な状況は確認できている。本墳は墳丘全長は112m、後円部直径62m、前方部幅87m、前方部高さ16mを測る後期型の前方後円墳であり、三段築成、西側くびれ部に造出が検出されている。二重周濠が圍繞する。周濠を含めた全長は218mとなる。墳丘の構築は第1段目が地山の削り出し、第2段目以上が盛土である。宇治古墳群中最大規模を誇る古墳である。また、古墳の築造規格は高槻市の継体天皇真陵とされる今城塚古墳と同じであり、その3分の2縮尺と考えられる。

外表施設として墳丘に人頭大の川原石による葺石が施され、段築テラスに埴輪列が圍繞する。また外堤上部平坦面にも埴輪列が検出されている。前方部及び外堤上部から形象埴輪片が出土しているため、これらの樹立が理解される。円筒埴輪は無黒班で、タテハケのみのものとヨコハケのものが混在する。倒立成形技法のいわゆる尾張型埴輪が含まれる。また埴輪胎土の蛍光X線分析では4種類の胎土が分析され、その内の一種類は今城塚古墳に埴輪を供給した高槻市の新池埴輪窯のものと一致することが指摘されている。

主体部は後円部削平時に消失しており現存しないが、当時の伝聞と後円部調査結果から主軸

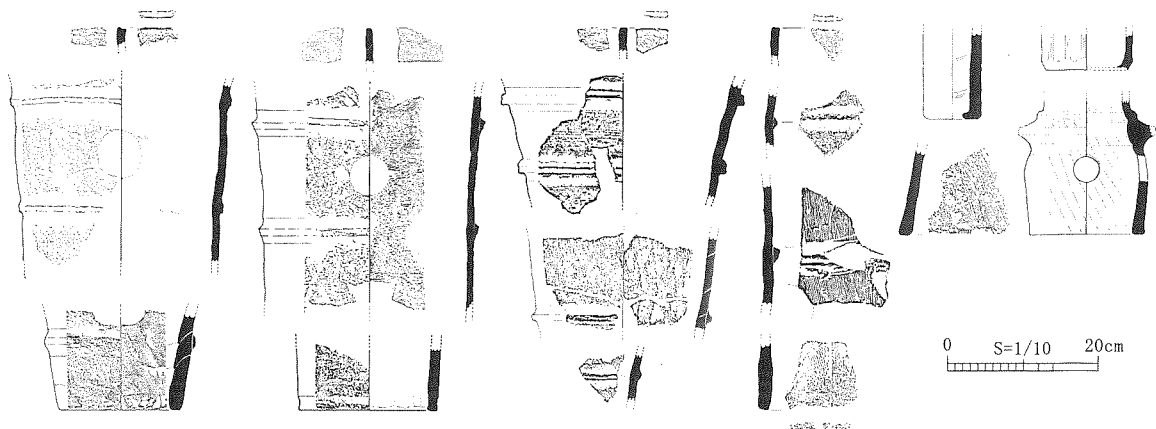


図11 二子塚古墳出土遺物実測図

に直行して構築された横穴式石室であることは間違いなく、東開口の可能性が高い。

後円部の削平は大正3・4年の現京阪鉄道宇治線施設に伴う土取りであり、この状況視察に訪れた梅原末治が埋葬施設の巨石が散乱していることを確認し聞き取りを行ったところ、石を積み上げた室があり巨石で上を覆っていたことを聴収している。現在、西方寺庭園に使われる庭石はこの時の石であるという。この削平時に出土した形象埴輪基部が京都大学総合博物館に収蔵されており、また伝二子塚古墳出土の仿製四乳四獣鏡の写真が伝えられている。

後円部中央の発掘調査では、後円部の中心に東西に軸をとる東西19m、南北8.5m、深さ2.8mの長方形の掘り込みの中に大きな礫が充填されている施設が確認された。この掘り込みの底は地山である。盛土内に横穴式石室を構築する際に設けられた基礎地業であり、近年、今城塚古墳で同様な施設が検出されている。

古墳の西側には幅20～25mの周濠が鍵の手に残り、その外に外堤が遺存する。幅は12～18m、高さは4～7mである。古墳の築造地盤が西に傾斜しているため、西側に築堤し周濠を構築したもので、東側の周濠は掘削によるものと考えられる。その外に外濠が検出されており、幅12m、深さ1.7mを測る。外濠内からは破碎された須恵器大甕が出土している。山城地域では本格的な二重周濠を具備する数少ない古墳である。

古墳の時期については、埴輪の型式と墳丘の型式から後期初頭に比定できる。

評価

二子塚古墳の特徴は以下の点が指摘できる。

第一に、二子塚古墳の立地から、この古墳被葬者が巨椋池を強く意識していることが明瞭に読み取れる点は、この古墳の被葬者像を踏まえ、古墳時代における交通と古墳の築造との関係を具体的に理解するうえで重要である。特に、岡屋津想定地を間近く望む点は、両者の同時性が確認できないとしても、内陸水運とこの古墳との関係性を強く示唆している。

第二に、後期の古墳として山城地方最大規模を誇る点があげられる。古墳時代を通じて山城地方では、180m級の前期の椿井大塚山古墳と中期の久津川車塚古墳、120m級の恵解山古墳に次ぐ規模であり、山城地方を代表する前方後円墳であることは変わらない。また二重周濠を本格的に具備する山城地方では数少ない古墳であり、当該時期では大王陵に準じる規模と内容の古墳とすることができる。

第三に、古墳の築造規格が継体天皇真陵とされる高槻市の今城塚古墳と同じであり、埋葬施設基礎として今城塚古墳と同様な施設を持ち、今城塚古墳に埴輪を供給した新池埴輪窯跡から五ヶ庄二子塚古墳に埴輪の一部が供給されているなど、今城塚古墳との強い関係性が指摘できる。

以上のように二子塚古墳は、中期における山城地方の大型古墳の衰退後、かわって出現した山城地方最大の後期前方後円墳で、二重周濠を具備するなど大王陵に準じる内容となっている。

また継体天皇真陵とされる今城塚古墳との関係性が濃厚に読み取れる点は注目に値する。『日本書紀』の「継体紀」には、継体天皇が即位後大和に入るまで、現在の大阪府枚方市に想定される樟葉宮、京都府京田辺市に想定される筒城宮、同じく長岡京市に想定される弟国宮に居住したことが記される。これらの宮想定地は、巨椋池西岸部から南にかけての地であり、内陸水運での交通で結ばれるところとなっている。

二子塚古墳は、宇治古墳群内における首長層の興隆を具体的に示す古墳であるとともに、『日本書紀』が伝える大王権の交代との関係が具体的にうかがえる古墳としてきわめて重要である。

参考文献

『宇治二子山古墳発掘調査報告』 1991 年 宇治市教育委員会

「I. 瓦塚古墳発掘調査概要」『宇治遺跡群 I』 1988 年 宇治市教育委員会

梅原末治「五箇荘二子塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第 4 冊 1923 年 京都府

「二子塚古墳外濠発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 10 集 1987 年 宇治市教育委員会

「五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告」『宇治市文化財調査報告』第 3 冊 1992 年 宇治市教育委員会